

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(202 .12)令和 年度:

文献検討

,

看護者側のメンタルヘルスから見た ひめゆり学徒隊についての文献検討

宮崎奈月 山本真生
(指導：升田由美子)

緒言

第二次世界大戦の沖縄戦では、看護師だけでなく看護学徒隊として、高校生や師範学校の女子生徒が招集され、戦時下の砲弾が飛び交う中で看護を行った。その学徒隊の中で最も動員数が多かったのがひめゆり学徒隊である。戦後75年となり、戦争の経験者で現代も存命されている方が徐々に少なくなっている現状で、戦争を振り返り、当時の劣悪な環境や多くの命が犠牲になった事実をうけとめ、伝えることが必要である(川原, 2022)。

戦時中の看護と現代の看護で環境が大きく異なるが、看護をする者の葛藤など心理的な部分で現代に繋がるものがあると考えた。そこで本研究では、沖縄戦のひめゆり学徒隊をとりまく状況や環境について把握するとともに、学徒たちがどのようなメンタルヘルスで看護活動を行っていたのか検討する。

用語の定義

メンタルヘルス：WHO(世界保健機関)の定義を参考にし、かつ戦時下である特殊性を考慮し、本研究では「精神状態」を示す総称とする。

方法

研究対象：第二次世界大戦の沖縄戦の看護活動を対象とした書籍のうち入手可能なものを対象とした文献検討を行った。ひめゆり平和祈念資料館に問い合わせし、紹介を受けた文献のうち、4冊の文献を対象文献とした。調査期間は令和4年4月～12月である。

分析方法：グレッグ美鈴ら(2016)による質的研究の手法を参考にした質的記述的方法とした。ひめゆり学徒隊を取り巻く当時の状況や環境(A)、戦時下特有の学徒たちの精神状態

(B)、学徒たちの率直な思い(C)を捉えている中心的な記述をコード化した。さらに、内容の類似性に従いサブカテゴリ化、さらに抽象化しカテゴリ化した。分析の過程では、2名の研究者が対象文献をそれぞれ熟読し、それぞれがコード化した後、研究者間で確認しながら分析を行い、妥当性・確実性・信頼性の確保に努めた。分析は指導教員の指導を受けながら行った。

倫理的配慮：文献を引用する場合は、出典を明示する。本研究は先行研究に基づく研究であり、著作権の範囲内で複写を行い、出所を明示し、その引用の方法に留意し、論文中の表記方法に従う。

結果

対象の4冊の文献から、(A)については366のコードから40のサブカテゴリ、6のカテゴリ

を抽出した(表1)。(B)では115のコード、53のサブカテゴリ、9のカテゴリを抽出した(表2)。(C)では98のコード、34のサブカテゴリ、9のカテゴリを抽出した(表3)。以下、カテゴリを【】、サブカテゴリを〈〉で示す。

考察

ひめゆり学徒隊を取り巻く当時の状況や環境の視点から考察すると、人の生活や看護における環境の重要性が分かる。ナイチンゲール(1860/2011)は、「新鮮な空気について病人が求める二番目のものは、陽光をおいてほかにはないということである。すなわち、病人を最も害する部屋は、閉め切りの部屋について暗い部屋なのである」と述べている。戦時下における病院壕内では、換気もされず、太陽光も入らない真っ暗な劣悪な環境、衛生材料不足、医療者の人手不足により傷病兵に十分な治療を施せなかった。そのような〈劣悪な環境と不眠不休の看護活動の中での疲労〉が蓄積されていったが、学徒たちは傷病兵への看護を続け、傷病兵に対して様々な思いを抱いた。また、分析の過程で「水」に関するコードが多く出ており、看護をする上でも生きる上でも水へのありがたみや貴重さを大いに感じていた。

そして、戦争の体験者は、〈戦後に感じた無知だったことへの悔しさ〉、教育の恐ろしさを語っており、学徒たちのメンタルヘルスに大きく影響を与えていたのは当時の軍国主義教育だったと考える。学徒たちは、動員当初は〈戦争への実感が湧いていない様子〉であったが、その中でも看護学徒として〈国へ奉仕することへの使命感〉があった。次第に迫る敵の脅威のため部隊解散命令が下されてからは、【敵の攻撃とそれによる被害】を受け続け、学徒たちは【戦時下における感情の喪失、精神の崩壊】を生じていた。しかし、その中でも学徒には【戦時下における生への執着、生存欲求】があり、【軍国主義教育による精神状態】に支配されながらも死に対する思いには葛藤があったと考える。その葛藤の中で【軍国主義と国の戦争方針】に憤りと疑問を感じる一方で、〈保護した市民への米軍の対応〉が、これまで自分たちが抱いていたイメージと違うことに衝撃を受け、敵として憎い感情が無くなっていき、【味方兵と敵兵に対する学徒の思い】が変化していくなど、現代とは違い特殊な状況であったと考える。

このように現代との環境が大きく異なる中でも、現代の看護と通底する点が見られた。学徒は、〈傷病兵を看護することの喜び〉や〈傷病兵を治したいという固い気持ち〉があり、〈患者の言葉に勇気もらう〉こともあった。このように、看護の喜びや誇りを感じ、やりがいを実感している点は現代の看護と共通していると考えられる。また、最後に水を飲みたがっていた傷病兵に対し水を与えられなかった経験を悔やんだり、看護したい気持ちがあるものの、自分の看護技術の未熟さや多

忙によって〈傷病兵の期待に応えられない無力感〉を感じたりなど葛藤も見られた。看護者としての葛藤は現代も生じる葛藤といえよう。

川原 (2022) は、「体験者の語りを通じて私たちが得ていたものは、おそらく起こった事実についての知識だけではなく、かれらの怒りや悲しみ、苦しみであり、平和への強い願いであった。それらを損なわないように、語りを未来に引継ぎ、伝承していくことができるのだろうか」と述べている。このように、事実の伝承だけでなく、本研究を通じた戦争体験者の精神状態や率直な思いにも焦点を当てることで、かれらの思いや平和への願いを未来へ引き継ぐことにつながると考える。そして、戦争という悲惨な出来事を二度と繰り返さないようにすることが、私たちの果たすべき役割だと考える。

謝辞

本研究にあたって、多くの文献を紹介・ご協力いただきましたひめゆり平和祈念資料館の方々に深く感謝申し上げます。

対象文献

- 1) 伊波園子 (1992) : ひめゆりの沖縄戦, 岩波ジュニア新書, 岩波書店.
- 2) 仲宗根政善 (1989) : ひめゆりの塔を巡る人々の手記, 角川文庫, 角川学芸出版.
- 3) 宮城喜久子 (1995) : ひめゆりの少女, 高文研.
- 4) 宮良ルリ (1986) : 私のひめゆり戦記, ニライ社.

引用文献

- 1) 川原由佳里, 難波妙, 榎田倫道, 他 (2022) : 戦争のある場所には看護師がいる——Nurses in Wartime, 39, 日本看護協会出版会.
- 2) フロレンス・ナイチンゲール (1860) / 薄井坦子, 小玉香津子, 湯嶺ます他 (2011) : 看護覚え書, 第7版, 145, 現代社.

表1. ひめゆり学徒隊をとりまく当時の状況や環境

カテゴリ (6)	サブカテゴリ (40)		
看護活動の状況 (12)	患者数の増加に伴う学徒の負担増加(7)	命がけで死体運ぶ(5)	物資も人手も不足している状況での悲惨な治療(7)
	患者の配置と看護師の割り当て(4)	不衛生で窮屈な環境に作られた病院(6)	多岐にわたる学徒の看護業務内容(2)
	負傷兵への食事の準備と食事介助(6)	不慣れた生徒たちとは違う看護師の行動(2)	責任がなくなってからも自主的に看護をつづける(1)
戦場での学徒の生活の様子 (5)	学徒をかばう兵隊(2)	負傷兵の悲惨な状態(7)	女性としての身の危険(3)
	命がけの食糧探し(4)	戦場での食事(11)	戦時中の学徒の清潔状況(3)
戦況に伴う学徒の動き (5)	戦時中のひとときの休息(2)	劣悪な環境と不眠不休の看護活動中での疲労(8)	
	戦争動員時の様子(8)	戦況悪化による撤退(9)	患者を置き去りにしての撤退(2)
軍国主義と国の戦争方針 (6)	解散命令に対する生徒の反応と動き(5)	動員前学校での訓練(3)	
	無知の恐ろしさと軍国主義教育(2)	お国のために死のうとする人々(4)	本土決戦を控えての沖縄戦の意味(3)
敵の攻撃とそれによる被害 (10)	胃酸カカリによる重傷者たちの殺害(5)	徹底した軍国主義教育(6)	看護日誌の馬鹿げた重要性(1)
	壕への敵襲(2)	死傷した学友(5)	悲惨な死体の様子(4)
	敵の攻撃による被害(9)	ガス弾投下時の地獄のような様子(4)	米軍からの投降を促す放送(2)
	ひめゆりに関する戦死者の数(1)	戦場での死傷(4)	艦砲射撃の惨状(3)
捕虜として収容された後の様子(2)	戦争による街の様子の変化(3)		
	保護した市民への米軍の対応(3)	収容後の生活状況(2)	

表2. 戦時下特有の学徒たちの精神状況

カテゴリ (9)	サブカテゴリ (53)		
動員前の看護学徒の精神状態 (4)	戦争が激しくなる前の気分転換(2)	戦争への実感が湧いていない様子(3)	戦争を実感できない中での学徒としての誇り(1)
	疎開していればよかったという後悔(1)		
戦時下における感情の喪失、精神の崩壊 (11)	生きている人間としての感情の喪失(4)	極度の疲労による絶望的な心情 (2)	死や危険に対する感覚の麻痺 (5)
	生きる気力の喪失 (4)	いつ死ぬか分からない覚悟 (1)	どうせ死ぬという気持ち (2)
	食糧、水不足による気力の喪失 (1)	疲労により無意識に寝てしまう (1)	死へのあこがれと恐怖の葛藤 (1)
	ひと思いに死にたい (9)	戦争の状況下による精神の崩壊 (2)	
戦時下における生への執着、生存欲求 (6)	危機や死の実感 (4)	無事に一日を生きたことのおしほし (1)	危険を承知しても親元に帰りたいという気持ち(1)
	壕が広く頑丈である事への喜び (1)	生への執着心 (1)	戦場を実感した震え (2)
看護活動に関する精神状態 (5)	看護学徒としての使命感 (4)	負傷兵の叫び声に対する恐怖 (1)	看護業務の忙しさにより学友の死を悲しめない (1)
	患者の言葉に勇気をもらう (1)	患者への対応に関する戸惑い (2)	
軍国主義教育による精神状態 (13)	帰校し戦場へ行くことへの葛藤 (1)	自決の決心を固めた (3)	戦争の勝利を信じた喜び (2)
	国へ奉仕することが名誉だという思い (2)	国へ奉仕することの使命感 (5)	国へ奉仕する使命感と家族と離れたくない葛藤 (2)
	軍国主義教育に支配された精神状態 (8)	米兵への警戒心と反感 (2)	自決することへの葛藤 (3)
	重傷を負った自分より他者を優先してほしいという思い (2)	勝利への期待と現実への絶望 (1)	戦争の実態についての無知さ (1)
戦時下での悲しさや恐怖など否定的感情 (6)	戦死することへの悔しさと国に奉仕したという誇り (1)		
	戦場での悔し涙 (1)	もう学校生活に戻れないという悲しさ (1)	水汲みの果てしなさに泣きたい思い (1)
学友や先生に関する精神状態 (4)	戦場を実感していなかったことを思い返す気持ち (1)	戦場での孤独感による涙 (3)	これからの状況に対する混乱 (2)
	学友と共に行動したい気持ちと家族と離れたくない気持ち (5)	撤退による疲労と学徒と会えた嬉しさ (4)	自分たちだけが生き残った後ろめたさ (1)
学友や先生の死傷による悲しさ (4)			
家族への思い (1)	戦争で感じる離れた家族への悲しさ (5)		
戦争に対する思い、悲しみ (4)	戦争のない時代に生まれたかったという本心 (1)	戦争での様々な体験による深い悲しみ (1)	戦争体験の継承 (2)
	敗戦を知った時の涙、悲しさ (2)		

表3. 学徒たちの率直な思い

カテゴリ (9)	サブカテゴリ (34)		
傷病兵への看護の中での思い (6)	傷病兵の期待に応えられない無力感 (6)	傷病兵を看護することの喜び (3)	危険な仕事を免除された安心 (1)
	傷病兵の姿への思い (1)	治療・看護処置を行う事への恐怖 (3)	傷病兵を治したいという固い気持ち (1)
死に対する学徒の思い(8)	死に対しての不安と死になれてしまうことへの恐怖 (3)	死を身近に感じた中での生の実感 (1)	生きるために逃げ続けたいという思い (3)
	死に直面することの悲しみと衝動 (1)	身近になる死への恐怖 (8)	死を間近にしての思い (2)
戦争に対する学徒の思い(5)	自決することへの疑問と葛藤 (1)	勝利を見る前に死ぬ悔しさ (1)	
	解散命令を受けての憤りと絶望 (4)	先行きへの不安 (3)	戦争行動への不信 (2)
家族、学友、先生への思い(2)	多くの遺体を目にして感じる戦争の悲惨さ (1)	食糧を略奪することへの罪悪感から死んでしまいたいという思い (1)	
	死を目前にしての家族への思い (12)	学友や先生への思い (7)	
味方兵と敵兵に対する学徒の思い(2)	味方兵に対する感情 (7)	敵に対する学徒の思い (3)	
水に対する学徒の思い(2)	水があることへのありがたさ (7)	水があることへの喜びと傷病兵たちへの思い (2)	
当時の軍国主義における学徒の思い(3)	非国民と言われることへの恐怖 (1)	戦時下の精神 (捕虜になるのは死ぬことよりも屈辱的だという思い) (1)	どうせ死ぬならばお国のためだという思い (3)
終戦から戦後に感じた学徒の思い(4)	敗戦を受け入れる気持ち (1)	戦後に感じた無知だったことへの悔しさ (3)	戦後に実感する人の死の重大さ (1)
	終戦を信じられない心情 (1)		
卒業式についての学徒の思い(2)	卒業式が行えることへの喜び (2)	卒業式も満足に行えない悲しみ (1)	